



綾威道子

五

U 5
5011
5





稜威道別卷第五

日本書紀神代上之三

一書曰伊弉諾尊ミトオモホヒテ欲見其妹イテミキミ乃到殯斂之

處是時伊弉冉尊ナホゴト猶如ツ生平ネノイテムカヒテトモニカクハラヒモヒキ出迎共語カク已

而謂伊弉諾尊ヲミキキアガナ曰吾夫君尊セノミコトヤ請勿視吾矣アヲナミタマヒソト

言訖忽然不見ミラミラヘテタチマキニミエタマハズソノトキクラクナリキ于時闇也伊弉諾尊チトモヒテ乃舉

一片之火ヒトツツビ而視之時伊弉冉尊ハレタケエマシテ脹滿太高

稜威道別

五之一

其魂乃幽冥ふ入と云也。然れハ天皇皇子等ノ崩薨
と。神上ト稱シ。又天所知^{カミガリ}と稱セ^{アラ}る。其實は就^{アラ}て
云なり。又凡人ノ死と。黄泉路^{ヨミミチ}ふゆく^チと云ハ。多^{アラ}目
に名え^{アラ}れ^{アラ}なる方を取て云詞也。と^{アラ}る故ふ。古くも天
とも。黄泉とも云て。あれ^{アラ}が^{アラ}ち貴賤^{ケチン}ハ差^{アラ}あるはもあ
ら^{アラ}ざりし^{アラ}。萬葉集ノ歌どもを乞て。知^{アラ}べし。此等ノ
子^{アラ}と。下^{アラ}卷ふ到る^{アラ}とふと。く^{アラ}度も出^{アラ}べ^{アラ}られ^{アラ}。此を
多^{アラ}く一^{アラ}く^{アラ}り^{アラ}にて止ぬ。

是を^{アラ}下津黄泉國へ幸^{イキ}け^{アラ}と忌憚^{イミ}て。其^{アラ}裏^{ウラ}を以て。天
ふ上^{アラ}と坐^イすと云^{アラ}ち^{アラ}せ^{アラ}る也。と^{アラ}る云^{アラ}る説^{アラ}ハ。彼^{アラ}黄泉と

云とげ^{アラ}地^{アラ}ノ底^{アラ}ハ在^{アラ}て。極遠^{アラ}國^{アラ}と。満^{アラ}ち^{アラ}惑^{アラ}ひ^{アラ}し^{アラ}る瘴^{アラ}
説^{アラ}が^{アラ}う^{アラ}し。萬葉ニ。山上^{アラ}臣^{アラ}憶^{アラ}良^{アラ}。見^{アラ}結^{アラ}松^{アラ}哀^{アラ}咽^{アラ}り^{アラ}し。追
和^{アラ}ふ。鳥^{アラ}翅^{アラ}な^{アラ}り^{アラ}あり^{アラ}か^{アラ}う^{アラ}ひ^{アラ}け^{アラ}る^{アラ}ら^{アラ}め^{アラ}と^{アラ}も^{アラ}人^{アラ}こ
そ^{アラ}ら^{アラ}ぬ^{アラ}松^{アラ}を^{アラ}知^{アラ}ら^{アラ}し。又^{アラ}作^{アラ}者^{アラ}不^{アラ}知^{アラ}。後^{アラ}又^{アラ}山^{アラ}と^{アラ}君^{アラ}が
結^{アラ}へ^{アラ}る^{アラ}岩^{アラ}し^{アラ}ら^{アラ}け^{アラ}子^{アラ}松^{アラ}が^{アラ}う^{アラ}れ^{アラ}と^{アラ}又^{アラ}又^{アラ}々^{アラ}ん^{アラ}う^{アラ}し。此
等^{アラ}昔^{アラ}の^{アラ}う^{アラ}と^{アラ}よ^{アラ}め^{アラ}る^{アラ}に^{アラ}て。誰^{アラ}ふ^{アラ}忌^{アラ}憚^{アラ}る^{アラ}と^{アラ}に^{アラ}も^{アラ}あ^{アラ}ら^{アラ}
う^{アラ}と^{アラ}と。如此^{アラ}天^{アラ}所^{アラ}知^{アラ}お^{アラ}も^{アラ}ふ^{アラ}き^{アラ}に^{アラ}云^{アラ}る。是^{アラ}そ^{アラ}ノ實^{アラ}に
け^{アラ}きて^{アラ}。云^{アラ}る^{アラ}に^{アラ}く^{アラ}そ^{アラ}ハ^{アラ}あ^{アラ}ら^{アラ}せ^{アラ}。

殯斂^{アラ}字^{アラ}ハ。説文云。殯^{アラ}死^{アラ}在^{アラ}棺^{アラ}將^{アラ}遷^{アラ}葬^{アラ}賓^{アラ}遇^{アラ}之^{アラ}釋^{アラ}名^{アラ}於^{アラ}兩
壁^{アラ}下^{アラ}塗^{アラ}之^{アラ}曰^{アラ}殯^{アラ}斂^{アラ}與^{アラ}殮^{アラ}同^{アラ}。殯^{アラ}斂^{アラ}也。又^{アラ}衣^{アラ}死^{アラ}也。檀弓曰。小
斂^{アラ}於^{アラ}戸^{アラ}内^{アラ}大^{アラ}斂^{アラ}於^{アラ}阼^{アラ}な^{アラ}と^{アラ}あり^{アラ}。人^{アラ}死^{アラ}て^{アラ}未^{アラ}葬^{アラ}さ^{アラ}る^{アラ}間^{アラ}假
ふ^{アラ}藏^{アラ}置^{アラ}所^{アラ}と^{アラ}云^{アラ}。○猶^{アラ}如^{アラ}生^{アラ}乎^{アラ}出^{アラ}迎^{アラ}云^{アラ}云^{アラ}。現^{アラ}身^{アラ}に^{アラ}ま^{アラ}れ^{アラ}。御

魂よりん。在し御姿よて。顯れまゝ。さへ
と其形容。御詞まて。云るは。專世の凡人の上に移し
て。語る辞をり。○言訖。忽然不見。此時女神ハ幽冥。男
神ハ現明なる由急に。消失。終ひて。忽ち見えぬま
ま。也。○于時闇也。彼目見え終ひ。間ハ暗しと
し。思行をりける。既ふ銷失終ひて。其跡闇くな
りしあり。今世にても。天狗。狐狸等ハ怪異。皆志あり。
○一片之火。此火の。既ふ出。是よりよく遇見終ひ
むとて。男神も思ひ。幽冥に入。せ終ひて。故。其
相語る。歸るし状。いづれり。きんとも傳へ知るべき。

たゞぬハ以下。例の談辞以て。埋りたる也。○脹滿太
高。此ハ上ふ。膿沸虫流とある。類ひふて。特更に垢穢
く。むくつけき。うごも。設出て。兒輩に。不須醜目と
作。志めて。厭。うら。むるなり。○有。八色雷公。抱朴子。
雷神曰。雷公とある。此雷公ハ。上なる雷神とを
別也。既ふ云如く。上つ代雷とを。只怖しき物の名な
る。これハ。此ハ。おどろ。し。た。物に。借て云る也。上有
とある文以て。知へし。さて。雷と云。名の。雄畧紀七
年七月。條下。云。詔。小子部。連。螺。羸。曰。朕欲見。三諸岳。神
之形。汝。脊力。過。人。自行。捉。来。螺。羸。答曰。試往。捉之。乃登。

三諸岳^ニ握^リ取^テ大蛇^ヲ奉^レ示^セ天皇^ニ天皇不齋戒其雷^ニ虺々目
精赫々^ト天皇畏^テ蔽^レ目^ヲ不見^ル入^リ殿中^ニ使^レ放^リ於^テ岳^ニ仍改^テ賜^リ名^ヲ
為^レ雷^トとある是^レ其物ハ大蛇^{ナリ}なりと^シ言^フ也^ト雷^トと云^テ
其捕^シ人^ル雷^トと云^テ名^ヲ賜^ヒ也^ト此^レ岳^ト萬葉^ノ雷^ト岳^ト
呂^ノ哥^ハ天^ノ雲^ノ之^レ雷^ト也^ト又^テ今^レ此^レ條^ニも擲^リ雷^トとあり^テ其^レ
退^走を^レ鬼^トと云^フ又^テ舊^ノ事^本紀^ハ岐^ノ大^ノ蛇^ノ段^ニ素^ノ戔^ノ
鳴^尊乃^レ拔^テ所^ニ帶^テ握^リ劍^ヲ寸^ニ斬^リ其^レ蛇^ヲ此^レ蛇^ハ為^リ八^ノ段^ニ每^ノ段^ニ成^ル
雷^ト怒^テ為^リ八^ノ雷^ト飛^リ躍^リ昇^リ天^ニ是^レ神^ノ異^之甚^ク矣^ト此^レ雷^ト畏^キ物^{ナリ}
云^フ云^フなり^ク此^レ等^ヲ合^セて^テ凡^テお^ろろ^ろし^キ物^{ナリ}云^フ
る^レと知^ハし^テ猶^モ下^ニに^テ云^フと^モ對^シへ^ルなり^ク○桃^ト延^喜式^ニ追^儼

桃弓^ト桃^ノ矢^トと用^フる^ルも避^レ鬼^也也^ト清原宣賢^云桃^ノ訓^ハ百^ト以^テ百^ト
木^ノ之^レ長^ク也^ト云^フ其^レ理^ヲ如何^{ナリ}今^レ按^ル毛^々ハ^レ真^ニ實^ニ歟^ト大^ホ
加^ム牟^ヅ豆^ツ美^ミ命^ノ大^ホ神^ノ津^ツ實^ニ乃^レ神^ノ語^ニ依^テ其^レ實^ヲを^レ褒^テ云^フ
る^レなり^ク也^ト漢^ノ籍^ニも桃^ノの^レ功^ヲを^レ記^スる^ル多^ク也^ト他^ノ國^ニ
の^レ末^ニに^テ迄^モ此^レ神^ノ語^ノの^レ驗^ヲや^レ流^レは^レる^ル檀弓^云君^ノ臨^ニ臣^ニ
喪^ニ以^テ巫^ヲ祝^フ桃^ノ列^ス又^ニ見^ル左^ノ傳^ニ桃^ノ殺^リ鬼^見本^ノ草^ニ桃^ノ制^ス鬼^見山^ノ
海^ノ經^ニ○鬼^ノ和^名抄^ニ於^テ迹^者隱^音之^レ訛^也と云^フと^モ玉^ノ
勝^間ル^レ難^レい^レれ^ど是^レを^レ順^の云^レれ^し如^クなり^クん^也此^レ
處^ハ漢^ノ文^{ナリ}故^ニ出^レれ^ど古^ノ書^ニ鬼^ノ訓^凡て^レ又^ニ
る^レ萬^ノ葉^ノも鬼^ノ魅^ノの^レ文^字を^レ毛^能と^シみ^テ於^テ迹^と

云る語ありし。本御國の古語もけありきありあり。中
昔尔食^レ人^ヲ物を。鬼と云るしハ。其項暫くくく窮鬼
属の多うりしなり其も幽冥の物なりハ。隠字の意
あり。又隠妻と云。或ハ鈴鹿山。大江山等の賊と云し
也。皆隠字とくれとくると以て。知へし。○是謂岐神
今本に。此本號曰来名戸之祖神（素子ノ）とありき。後人の書
入也。祖字。大道（オホミチ）の訓ふ當くくべされとも。快。和名
抄ふ。道祖（ミチノサト）加（カ）倍（ハ）乃（ノ）とありき。塞ハ。道饗祭祝詞ふ。湯津
岩村乃如塞坐神（イハクラノヨリサヤリミス）とありき。意なりハ。いふくれども。道祖
ハ。漢くやなり。康熙字典云。祭道神曰祖。祖。祖也。詩經

出祖。注云。将行犯^{（ト）}較祭也。和名抄ふ。風俗通を引て。道
祖を。共工氏子と云。後人岐神と。道祖と。混合する
忌ハ。ききり也。○所謂八雷者云云。此ハ色。雷の名れ
配當さゆ。皆各其作意あり。先づ首に大雷と。頭の
大さかりき。懼き謂なり。胸ふ火雷と。怒り腹立て。
心火の燃る謂なり。腹ふ土雷と。腹凶（キタナ）く。心忌き謂
なり。記ふ黒雷とありき。腹黒きハ。悪心也。背ふ稚雷
と云。後ハ心置る。處なり。故ふ。腋（ワキ）ふ。衛（エモ）居（ル）より
あり。記ふ左手とあり。合てしきりし。尻ふ黒雷と云。後
を聞レ謂なり。手に山雷と云。山と云。按取謂なり。足

一書曰伊弉諾尊追至伊弉冉尊所在處
便語之曰悲汝故來答曰族也勿看吾矣
伊弉諾尊不從猶看之故伊弉冉尊恥恨
之曰汝已見我情我復見汝情時伊弉諾
尊亦慙焉因將出返于時不直默歸而盟
之曰族離又曰不負於族乃所唾之神號
曰速玉之男次掃之神號泉津事解之男

凡二神矣且及其與妹相鬪於泉平坂也
伊弉諾尊曰始為族悲及思哀者是吾之
怯矣時泉守道者白云有言矣曰吾與汝
已生國矣奈何更求生乎吾則當留此國
護不可共去是時菊理媛神亦有白事伊
弉諾尊聞而善之乃散去矣但親見泉國
此既不祥故欲濯除其穢惡乃往見粟門

及速吸名門然此二門朝既太急故還向
 於橋之小門而拂濯也于時入水吹生般石
 土命出水吹生大直日神又入吹生底土
 命出吹生大綾津日神又入吹生赤土命
 出吹生天地海原之諸神矣
不負於族此
云宇我邏磨

概
算

○追至伊弉冉尊所在處所在處とい幽冥なるを此
 傳ふとい神避とも申さる殞斂とも准へば直に幽
 冥と指て所在處とい云る也○悲汝云云悲とを萬
 葉ふ悲妹悲子等なや云ると同じくしてほふ
 意也凡て深く身ふ染ておほゆることを加奈志と
 云助辞の裁も即是也さして此段も現世の人情に移
 して云る方を同じうれど此一書ハいや古く正し
 き一の傳へたりなれハ姑く談辞のよろしきとき
 さやれあや○族也云云族ハ生属親族ハ祖属なり此を
 上ル吾夫君尊とある意なれども幽顯隔界重く

て今既ふ幽ふ入致ひつればよきしげに詔ふ詞
なり心ほくしし。○汝已見我情、あそ勿者吾と制し
致ひしに猶不聽して強て見致ふ故ふ。如此の申致
ふなり。此情字ハ、隱忍ふ心此裏のうに用ひなり。
○我復見汝情云云。幽ハ顯ふ隱也。顯ハ幽に隱ふ、
方もあるべきやをれふ。顯より吾幽を顯ハし致
へハ、吾も亦幽なり。汝命の顯、隈と露し果なしと告
致ふ也。萬葉に、現身し。幽ふ勝ぬハ云云とあり。
る如く、互ふ不堪處の有べきなり。總論、幽顯條と合せ
て考ふべし。故、此ハ、伊時諾、尊亦慙焉と云ふなり。

此ありし。幽顯の阻界を悟るふ。縁ありし多し。眼
とほくしし。○不直、默歸而云云。直、默ハ、續紀、詔詞、伊
勢物語等に足るし。不用に空しくハ、そのせいの意
ふ云。萬葉に、默字と、奈衰とも、牟陀ともあり。
即此も、直牟陀ふは帰らばと、譯して、其意ありし。
○族離、こを上、建絶妻之誓とあるや同しくて。然
らば夫婦中を絶んと、詔ふも一也。○不負於族、此
ここのを是は、汝命と二柱ふて、御子ハ產生は
ば、今族離れて、朕一柱ふて、得生じと思ふべ
かれども、汝命ふ負んや、と詔ふも是也。是實ハ談辭

なりやれど、次く三神の顯出アりレ運ビりウ。○乃スナハ所ナ
唾ツキレテ之云レ。汝ニ産ミ方リやシて、先ツ假ム唾シて、次
の二神と顯生アラハし出テ。示セ路ムよシ也。さて唾ハ、前
後ニ出スるニ多クハ醜穢物キタナキ也。時のやまされ
と。此コハ然ラんニ只シわリそレに唾シてシふカくル如クと
のまに用ハりシり。○速玉之男ニ唾シと玉ノと云。即此字
乃如ク。速ス玉ノ御魂ハ顯リれ出シ坐シるニよシ也。神名帳
ハ、紀伊國牟婁郡熊野早玉神社大。纂大疏云今ニとルゆ。
按ル式ハ熊野坐ス神社大名神とある也。今本宮なり。早
玉神社ハ新宮也。社傳ハ本宮ハ菊理姫命新宮を

速玉命。那智ノ事ト解ケ之ノ男ノ命ト云レ。夫木集ム。ちぎの
葉ハみがけル露ハ速玉と結スの宮ヤ也リとシるニん
とシ。此一書ありんカるニ來歴も、去ルべシう
らレ。又熊野社の古ヘよりシるニ靈験ハのカとシる
ことト以テも、此傳ハの空シかシるニと悟ル
べし。世ハ纔ニ神典トを窺ム徒ニ。此紀ハ一書ハ傳キ
を見て、或ハ本文ハの趣意ハ違ハひ又記ハの傳ハハ異
るニるニ也。あリば疑ヒて、親王ハのさシるニるニあリを
云フ。さシるニるニ皆おノうニ辭見ハせセむル故ニ吾ガ神
祕ハ五箇條トを以テ解キときハ各ハ皆本文ハの羽翼トとシま
りて、其畧傳等ハの全クなりシゆクをシん。親王ハの傳ハハ
も叶ハらズるニ神祕ハ口訣ハハ、いハはシるニあリはシるニ證ハを
さシるニあリはシるニかシるニ。

○掃之云云。彼、唾をぬき掃ひはく。又次、神を顯生アツクひハシしキ也。楔、掃除ハラヒしと云はる。○泉津事
解之男、泉津ハ、幽冥ふりたるなり。故ふ、そんて稱ナリひ
なり。事解ハ、絶妻解トケハ義ふて、此神顯出坐アツクて、上の條ヨチに
り云る。女神男神の諱イハハ事解ケて、又睦ムスしと云り
終ハふハの、稱ナリ号ナリなり。即次の守道神、菊理媛神
の執成トク終ハふハともハ、皆此事解、神の御心なればなり。
號下ハ、曰、字を脱せるなり。○且及云云。今本とも
なけ、此且、字を脱せり。今古本以て補之。○相聞云云。
此時女神ハ、固モトニ族離ウラしハの御心なり。ゆりしハなり。

此、聞諱キコを、なると、なり。平坂の、う、既ふ出ツ。○悲哀アハ良
字ハ、慕と謬アりハ。歎ナ。○始ハ、為シ族ウラ悲アハ云云。後悔の詞也。
かく後悔、し終ハふハ始ハ、より男神の告終ツハ、御詞ど
も、つや、怨ウラなり。なれど、女神の御心と、いつと痛イく
背違セひて、つや、く云、かひの無ナり、けり、ま、に、知チ
此ハ、詔ふ趣きなり。そのより、次ハ、御詞ふ合せて、知
し。○泉守道者イモツチノミチノカミ、泉イハ、上の例ハ、如ナし。道守ミチノモリハ、執持トクモチの
義也。登ノボ利リハ、知チと約ヨク也。母ハハ、彼、行違イひハ、つら、み、ご、し、を執持トクモチ
こ、御中と結ムスひ終ハふ、故ナ、稱ナリへたり。○也、古註等コシュトウふ、
葛葉和名抄等の道守ミチノモリを引、泉路イミチの道と守モリ神也。と

云る。此^コ縁^リし。○有^イ言^ハ矣^ナ。此^コ守^チ道^ノ神^ノの言^ハを非^ズ
以^テ伊^ハ特^ニ冉^ニ尊^ノの告^ル工^ノ御^ノ言^ヲと承^テ。白^セる^ルを^レり^レれ^ル
ハ。有^レ言^ハと^ハ訓^フ。是^レ則^チ執^テ持^テ告^ル也^ナ。○吾^ハ與^ニ汝^ト已^ニ
生^レ國^ヲ矣^ナ。奈^ニ何^カ更^ニ求^ム生^キ乎^ナ。此文^ノの意^ハ。吾^ハと汝^ハ命^トと。既^ニ
國^ヲも作^リてあ^リま^リし。神^トも産^ミし。顯^ニ露^ノ事^トの力^ハ及^ブ
限^リを^レり^レ也^ナ。此^ハ上^ハ。幽^ニ冥^ノ事^ト以^テ汝^ハ命^ノの神^ノ功^ヲ助^ケけ^ル
る^ルせん^ト。黄^ニ泉^ノに^テ入^リたる^ルを。奈^ニ何^カも事^ヲ新^シし^ト
生^キと^ハ求^ムる^ルを^レり^レ也^ナ。答^ルる^ルを^レり^レ也^ナ。如^キ此^ノを^レり^レ也^ナ
又^ニ至^リて。千^有餘^年來^ル。一^人も解^得ず^ル。釋^スる^ルを^レり^レ也^ナ
○吾^ハ則^チ當^ニ留^テ此^ノ國^ヲ護^ル不^レ可^ク共^ニ去^ル也^ナ。此文^ハ。此^ハ時^ノ男^ノ神^ノ

あり。あまのに帰^リて。詔^スに。女神^ヲ答^ヘへ。吾^ハ唯^ニ
此^ノ幽^ニ冥^ノに留^テて。陰^ノの神^ノ量^ヲ。今^ハも天地^ノ黄^ニ泉^ノ
乃^チ大^ニ君^トと顯^ニ生^レ奉^ルらん。此^ハ大^ニ事^トある^ル故^ニ也^ナ。汝^ハ尊^ノの^レ子^ト
詔^スふ^ルも。吾^ハ歸^ルと^ハ白^シる^ルを^レり^レ也^ナ。是^レ則^チ上^ノの一^ノ書^ト也^ナ
共^ニ生^レ日^ト神^トとある^ル。古^ノ傳^ハ本^ノ義^ヲある^ルを^レり^レ也^ナ。然^レに昔^ハ
より。此^ノ意^ヲと得^ズる^ルを^レり^レ也^ナ。讀^ムる^ルを^レり^レ也^ナ。能^クる^ルを^レり^レ也^ナ
ほいふ護^ノ字^ヲを^レり^レ也^ナ。今^ハ古^ノ本^ハも據^テ補^ヘ
る^ルを^レり^レ也^ナ。舊^ノ事^本記^ヲを^レり^レ也^ナ。是^レも印^本ハ。紀^ノ今^ノ本^ノの如^キ
し。校^本云^ハ。時^ノ泉^守道^者云^ハ。吾^ハ則^チ當^ニ留^テ此^ノ國^ヲ不^レ可^ク共^ニ還^ル
去^ルとあり。書^紀も。本^ハ然^ルを^レり^レ也^ナ。○菊^ノ理^ノ媛^ノ

神御名義ハ括姫イサロヒなるし。括ハ結トクと同くて。上より
乃關諱事イサロヒの執結トリムスビとけけけへれ。此の文は連きに
も此媛神比申せる言と伊弉諾尊聞而善之乃散去キ、ヨココバシテ。善テアラケマシヌ
矣。とらり。今の世は言ふも。終の結トクと括イサリと云ふ。さて
此括イサリに菊字を書るハ。菊も古くハ。久々と云ふに
や。和名抄肥後菊池。久知クチと有。朝鮮人菊曰久ク。其
より移サマるる。のと思ふに。菊花の形は。括イサリより。顔
か。より云ふとも云ふ。重遠云。加賀白山三所中。菊
理姫を祭。東西諾冉二柱を祭。神名帳云。加賀國石川
郡。白山比咩神社。蓋取白事之義乎。廿二社記云。日

吉。攝社菊理媛神云云。又丁廿九云。桓武天皇即位延曆
元年。天降八王子。麓白山。菊理比咩神也。云云。○散ヤラケ
去矣。あゝとく。集會せし人の。己が心も。散行よ
と出。語也。ちり浮べる船をけり。と。又あ
松原や。云々。○但親見泉國云云。此ハ幽と
顯と相混清て。盟約ウケカケ為ぬ。と。汚穢ケガレと。けり也。大
祓詞云。蠱物ウジモノ為罪ツミとあるも。蠱術ウジカハ。現世イハレに。幽冥カミ
事コトに近きわが。故ふ。罪とせし也。猶下の天照大
神と。素尊と。御誓ミウケヒ段と相合せて。双方け意を悟る
べし。○粟門及速吸名門云云。粟門ハ。淡門ヤハト云々。上の

一書に下瀬是太弱とあるに當き、速吸名門ハ上ッ
瀬是太疾とあるに當き、これハ此粟門と阿波、鳴
門也といふ速吸名門と豊後國也と云類ハ只後より
の推當にして、均ほはこれし。

此外舊說等に筑前國糟屋郡ふ豆花と云處あり
まゝ同國席田郡ふ青木村あり住吉神社と去こ
や一里許又早良郡ふ姪濱と云處あり其處ふ
小戸あり小祠あり其近ふ亦青木村ありたこと
云々是と云々地名ハ此古語ふ据へ後ふ作れる
ら多うり其中に速吸名門ハ神武紀ふも出こ、式
内神社もあれハ因りけなれと此太古の跡を
らん、猶おむつ、此門ハ豊後國海部郡ふ一

て今鷹嶋と云豊後と伊与との間ふ在と云と
てハ地理も合い、上は云と考へし。

○此二門云云、其も弱き方なり有へきなれ
か、淡門と云に、りりて省る也。○磐土記ふ石土毘古
式ふ土佐國長岡郡石土神社、即表筒の轉れ、ちり
○底土底筒の轉れ也。○大綾津日、大福津日乃轉
り、ちり、三代實録下野國綾津日神。○赤土中筒の
轉り、ちり、此傳ハ、かく稱へ、ちり、のみに
舉て、日月神を始り、御名の異なり、ちり、を省る、ちり
されハ神の次第ハ異なり、ちり、吹生と云、幼言の

運ひよ引色うらなう。泥むべうら文。

○此一書け大意ハ、ちりり伊弉冉尊御子生々て此
上ハ、幽冥の神量以て奉助んとて、黄泉隈入坐け
る。男神慕ひて跡見給ひ。汝命と悲みて、追来つと
詔へる。女神顯われ出給ひて、吾ハ既ハ幽入
れハ、吾カ形貌を分見給ひそ。と制止給ひき。然るを男
神聴給ハ、とて去りてあら。又給ひき。故女神耻給ひ
て申給ハ、幽と顯とを界別ありて、互ふ忌へき。う
あうと。吾が止るを聴とて。然る為給ハ、汝命の
現世よりして忌給ふ。うと。吾又顯し害けてんと。白

し給へハ、男神もさすうに慙給ひき。男神さうとて
只のぼろに、空しくやハ還るべきとて、盟び給へ
く。汝妹命より、現世に帰ら給ハ、族離て夫婦の中
と断ん。汝なして御子生ざらうや。今假ルかう唾
去てうふ。かくこそあれとて。先速玉之男神を顯ハ
し坐ぬ。又其唾を掃ひて、事解之男神を顯ハし給ひ
き。されとも女神ハ、固且夫婦の中絶人の御心なら
されバ、然あそあう。い。な。や。も。然らんと。争ひ給へ
る時、伊弉諾尊は、い。女。神。の。帰。り。ぬ。と。恨。み。坐
て。如。此。云。か。い。あ。き。る。な。う。ば。追。来。ざ。ら。ま。い。の。を。

初^メ族^ヲ悲^シと思^ヒて来^シハ。吾^ガ怯^クう^レし^クなり^ト。悔^ミ
賜^ヒく^ル速^玉神^ヲ速^ク悟^リて。事^ノ解^之神^ハ解^カし^メ
孫^ハ故^シ事^ノ解^之神^ニ承^テ。守^道神^ニ執^持せ。菊^理媛^神
事^ノ結^ト附^キし^メ孫^ハ此^ノ神^ニ執^持て
白^ク孫^ハ女^神ノ歸^リぬ^キ。惡^ク御^心あ^はさ^ス
既^ニ顯^ル事^ハ及^ブ限^ヲハ^シ盡^シ果^ツ只^ニ此^ノ幽^カ
事^以て助^ケ參^ラせ^ンと^テ。幽^冥入^ル孫^ハなり^ト
幸^レハ。吾^ハ今^ヨリ此^ノ界^ニシ^テ。幽^カク^シ守^護助^ケ幸^ニ
奉^ラん^ノ御^心あ^は坐^スと^テ。白^クぬ^キ茲^ニ男^神始^メて。其^レ
幽^カ玄^キ神^量と聞^悦ハ^シて。互^ニ御^快く。幽^ト顯^トハ^シ散^ラ

け別^ニと^テ孫^ハ其^ノ重^キ隔^境と犯^シ
て。盟^行為^ハ阿^豆那^比罪^ヲ得^ル必^ズ嚴^シノ被^ラ
除^クし^ト。遠^ク筑^紫ま^テ行^幸て。御^濯被^シ孫^ハ
き。亦^ハ女^神御^助けい^ちど^ろく^シて。云^ク云^クの貴^キ
た神^ノあ^らる^ニ顯^出せ^孫ハ。其^ノ神^ハち^ハ御^名を
上^ノ一^書等^ニ由^リて。唱^への異^ナる^ノのみを
い^はす^ナり^ト。

右^ニ四^柱神^ノ内^ニ守^道神^ト。菊^理媛^神とハ。御^生の所^ニ
由^リて。出^ルる^ニ。此^ノ時^ニ幽^冥より顯^レぬ^キ
なり。幽^冥より顯^レぬ^キ女^神の所^ニ顯^レぬ^キ也^ト
其^レ速^玉之^男と。事^ノ解^之男^ノの末^ニ。凡^ソ

ニ神矣とある。是男神の所生歟ハ。此ニ神の
みなりハ。

一書曰伊弉諾尊勅任三子曰天照大神
者可以御高天之原也。月夜見尊者可以
配日而知天事也。素戔嗚尊者可以御滄
海之原也。既而天照大神在於天上曰聞
葦原中國有保食神。宜爾月夜見尊就候
之。月夜見尊受勅而降。已到于保食神許

保食神乃廻首嚮國則自口出飯又嚮海
則鱈廣鱈狹亦自口出又嚮山則毛麋毛
柔亦自口出。夫品物悉備貯之百机而饗食
之。是時月夜見尊忿然作色曰穢矣鄙矣
寧可以口吐之物敢養我乎。迺拔劔擊殺
然後復命具言其事。時天照大神怒甚之
曰汝是惡神不須相見。乃與月夜見尊一

日一夜ヲサカリイマシマ隔離而住是後天照大神復遣天
 熊大人ウシヲミセタマヒキ往看之是時保食神實已死矣唯
 有其神之頂カミノイタキニナリキ化為牛馬ミヒタヒニナリ顛上生粟ミマユニ眉上生
 蠶ユメニ眼中生稗ミハラニ腹中生稻ミホトニ陰生麥及大豆小
 豆天熊大人悉取持去而奉進之于時天
 照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可食
 而活之也乃以粟稗麥豆為陸田種子以

稻為水田種子又因定天邑君即以其稻
 種始殖于天狹田及長田其秋垂穎八握
 莫々然甚快也又口裏含蠶使得抽絲自
 此始有養蠶之道焉ハレモリキコカヒノワザガ
 此云宇都志ウツツシ積ツキ鳥比等トリヒト久佐クサ

○勅任選叙令云勅任奏任判任と云々ありあり重き
 官ハ勅任なり義解云大納言已上左右大弁ハ此例
 云據て勅任と書れり言ハ事と寄るの義也

○可御治高天原。如此云て。天日を所知と云く中も也。
萬葉ニ云。天照日女之命。天乎波所知食とありを。即
其意を得てよめり也。日女と稱て。日を保孫義な
る。既云云う如し。○月夜見尊云云。月夜見也。月夜
持の言をれ。配日而云云と云る也。○素戔嗚尊
者云云。上云ハ可_三以治_二天下也とありて。此尊ハ始_レ天
下と所知_レ後_レ黄泉と所知_レ方_レハ。勿論の事として。
相攝_レて也。滄海原と所知_レ治_レとあり。此滄海原と所知_レ治_レ
既_レ上_レ條_レ月讀尊_レ下_レ云_レけれと。此_レ黄泉に。由縁_レあ
る_レと。い_レう論_レと_レし。そ_レもく_レ火_レを_レ天_レに_レ属_レき_レ水_レを

黄泉に属て。海ハ幽顯の間_レ在_レる_レが如き物なれ_レハ
如此_レ傳_レへも_レある_レなり_レと_レされ_レハ
大被_レ祝詞云。上畧_レ遺罪_レ波不在_レ此_レ被_レ給_レ清_レ給_レ事_レ乎云云。
瀬織津比咩止云。神大海原_レ尔持_レ出_レ奈武_レ如此_レ持_レ出_レ往
者。荒塩之塩乃八百道_レ乃_レ八塩道_レ之塩乃_レ八百會_レ尔坐
須速開都比咩止云。神持_レ可_レ々_レ吞_レ武_レ如此_レ可_レ々_レ吞_レ武_レ
波氣吹_レ戸_レ尔坐_レ須_レ氣吹_レ戸_レ主_レ止_レ云_レ神_レ根_レ之_レ國_レ底_レ之_レ國_レ尔
氣吹_レ放_レ氏_レ牟_レ如此_レ氣吹_レ放_レ氏_レ波_レ根_レ之_レ國_レ底_レ之_レ國_レ尔坐_レ速
佐須良比咩登云。神持_レ佐須良比失_レ氏_レ牟_レ云云とあり
也。海_レの_レ黄泉_レ尔_レ因_レ新_レ故_レ也。恒_レ水_レの_レ不_レ淨_レと_レ清_レむ_レ

も。此縁とそむけし記。

此祝詞ふ据て按ふ。上、檜原、榎、段ふ。右の瀬織津比
咩以下、神々ちね先づ顯現しし也。其神等持別て
伊弉諾、尊の被召し、罪穢と。本つ黄泉に返却しと
て、顯出召し、然るに、然ると記さ。八十枉津日
と云るに、即彼、時被除召し、罪ともの大名にして、
檜原より黄泉界に却し逐れける故ふ。枉津日
とい、黄泉神とい云るなり。道饗祭、祝詞ふ。八十
枉津日と指て、根、國底、國与利、鹿備、珠備、未と云る
類に猶多し。

さて然の幽冥、因る水と。顯露、火とを以て、
煮炙して命をけり。又事とあり、時、身、滌と。庭燎と

ふ因て、殃災と除き、幸福と招くなり。皆幽顯の二
乃互に相接る所以也。彼、二柱相並に神の一柱ハ幽、
属一柱之顯、属て、神功と立召し例ふ合せて、其深
き所由、以て想ふ。さて上文月讀、尊の方ふ
ハ、可_三以_三治_三滄海原潮之八百重也とあり。今此一書の
素戔嗚尊、方は、滄海之原とあり。此ハ月讀、尊の方
也。潮之八百重と云ふ主にて、滄海、原ハ、潮と呼
出んを以添ふる文也。素戔嗚、尊、方ハ、滄海、原と云
ふ主なる故ふ。潮の、ハ、此、差を以て、潮の月、隨
ふ、海の黄泉に因ありとを傳へたる。古傳の意趣

○有保食神云。釋紀云。私記曰。保猶
保持也。宇氣者食之義也。言是保持食物之神也。とある
即豊宇氣姫大神坐す。既ふ出。○廻首
云。是より例の談辞也。上竹軒遇突智神段ふ合せ
云。○鰭廣鰭狭魚の大小と云。○毛鹿毛柔。獸の大
小と云。祝詞に文ふ常多くして。今釋するともある
さへし。其中に毛柔ハ鳥と云と云説あり。今按ふ。兎
類ハ鳥とも兼。但皇朝の古ハ。獸と食
さるるを。御獵ハ專。武勇ハ。祝詞に文
海山の物を數へ立て。敬ふの。みなり

神前ハ獸を奠る。考へる物あり。○品物。易云。品物流形。○机。坏居
の義ふて。食物の臺と云。和名抄。業。都久惠とありて。
文案に時ハ。布都久惠と云。○忿然。戰國策。忿然作
色。い。氣上なり。故。此四字と。於母保。利と訓
。面ハ赤く。新撰六帖。山の端ハ。ほ
。室ハ。浦ハ。明日ハ。ハ。出。舟人。此
。嶺表録云。春夏。間有。謂之。○拔。擊。云。是。彼。軒
。命。御首を斬。類。の。辞也
。此。記。須佐之男。命。天。降

終る時のるると名ぬ。本より談辞なり。これハ語る人
 の心より設しあり。いぶうしむへきにあはれ。○天
 熊、大人、熊ハ熊野の熊と同じく、幽冥の意也。此ハ密
 使、竹、肯を、主領終るより也。今本に、天、熊人とある也。
 大字を落したる也。下卷に、大背飯三熊、大人とある
 也。密使なり。○頂、化、為、牛、馬、云云。先註とりに、牛馬を
 食物よありとされ。ハ、い、う、や、い、い、又、助、農、業、故、云、頂
 化、為、なりと云る也。泥、る、也。其、ま、ご、も、あ、り、只、稚、子、の
 ころに、お、ご、ろ、く、し、九、語、こ、ろ、へ、ち、る、也。○顯、契、仲、云、當
 作、額、の、蠶、繭、の、俗、字、說、文、蚕、衣、也、一、本、作、蠶、虫、か、り、又
 かふことも云、養蚕也。繭、和名抄、万由、さく、此等の名
 義、粟、ハ、淡、き、を、蠶、ハ、黛、形、似、し、故、云、歟、又、真、穀
 綿、の、よ、し、の、稗、ハ、荏、菴、香、柔、等、の、中、に、秀、ち、る、よ、し、の、稻
 ハ、飯、穎、麥、ハ、聚、芒、大、豆、ハ、圓、實、小、豆、ハ、赤、食、ち、の、意
 の、○顯、見、蒼、生、顯、見、ハ、幽、冥、に、對、て、此、世、に、あ、る、と、云、
 總論、ハ、安、く、出、し、う、蒼、生、字、ハ、晉、書、に、誤、天、下、蒼、生、と
 見、由、黔、首、の、謂、也、○可、食、而、活、之、也、顯、露、ハ、あ、る、現、身
 け、必、れ、物、を、不、食、て、を、活、さ、る、ハ、元、よ、り、の、り、な、れ、と、此
 を、幽、冥、より、曰、ふ、詞、也、此、御、詞、ハ、對、て、幽、冥、に、萬、靈、を、
 物、食、ふ、も、及、ば、さ、る、る、を、さ、ら、へ、し、

此現世にても、靈龍、龍蛇、諸蟲の、蟄せし間、物食ハ
以してある也。無心して幽冥に入らざる如く
なれば、あらずし。但神の御食田と乞ひするのあり
は、專尊敬と、現き人ふ示したまふなり。神に慈心
のまにふはあらずに。

○陸田ハ、乾田の義也。火田と云。波多計と云ハ、畑類
ふて作らつけし物と云。萬葉十八ふ、宇惠之田毛
麻吉之波多氣毛安佐其登爾之保美可禮由苦とあ
るにて知へし。○水田、和名抄、古奈多、埜之田の義也
海へし。○種子田、根をり、合之て畑津物、田津物と云
時ハ、作ら物一切を兼て云。○定天、邑君、邑君ハ、邑長

なり。かゝる首長を置るゝなり、人の代と成ても、成
務天皇、朝より後のるり追々に語るるなり也。
和名抄ハ、漢翁、無良岐美とあるハ、おろつりし。○狭田
長田、下文云、以天、狭田、長田、為御田。狭田ハ、真沼田の
義也。萬葉に、佐野田乃苗、まゝ、筑摩、佐野方、又諸國ハ、
狭縣と云地、の多うらも、皆上田に跡也。長田ハ、長秋
の長にて、稱辭也。○八握、祈年祭祀詞ハ、八束穂乃茂
之穂、顯宗紀云、新墾之十握、稻之穂。○莫々然、詩周南、
維葉莫々、注、茂密之貌。文選、扶疎、萬葉、四握、管家、万葉
垂、○垂穎、文選、西都賦云、五穀垂穎、爾雅、禾穂謂之穎。

○抽絲陸倕漏刻漏銘キ微若抽繭ミエラ○養蠶キ或說云今の蠶ハ仁徳天皇御代漢渡物なれハ和名加良カ万由マユと云此ハ山璽シと云也と云るハ非也式シ陸奥國會津郡コカヒノクニ養蠶國神社頭書云稚也皇産靈神あるものもやさて此段記ふ也大宜都オホイゲツ比賣神ヒメノカミと素戔嗚命スサノヲノミコトの殺し給ふとせし故尔大宜都比賣保食ヒメノカミノホシと同神とせれと定め難し山祇海神ヤマシメノカミふあらし神の坐イマスが如く食物ケツモノ方カタ必カナラ一神イツノカミふは有へうらび神名帳カミナマヅチ等に祭マツル所トコロと相合せて知しし

○此一書の大意ハ天照大神ハ天日アメノヒとまらし月讀ツキヨミ

尊ミコト天月アメノツキとまらし素戔嗚尊スサノヲノミコトハ海原ウミノハラうけて黄泉ヨミとまらし此間ハ次文の御誓の事なるとあり其後天照大神アメノミコト現アワれ青人草アヲヒノクサの食ケて活イカへき物モノと保食神ホシケノカミの保持タモナたまへる五穀イハヒノコ蠶カそれ外種ソノソトの物モノと幽冥ヨミの神量カミナリ以て細ツグらしめ給へる此ハ實の是即皇孫ミコトノミコト尊ミコトれ天降アメノツクの御時ミコトノトキ賣ウり給へる此ハ實のひし稻穂イハヒノエの起オキり給へる此ハ實の傳ツタへし此ハ實の

於是素戔嗚尊スサノヲノミコト請イタ曰イハ吾ミコト今イマ奉教ホウケウ將就根國マカシメ

故欲暫向高天原與姊相見而後永退矣
カレシラクマヤテ、ニ、ナネノミヨ、アヒミテノチ、マカリテト、ラシヨフニ
 勅許之乃昇詣之於天也
ユルシマシキ、チ、マヤノボリマシヌ
 是後伊弉諾尊
カムゴトステニヨヘテ、アメニカヘラムトセス、カレウツリテカミミヤヲ
 神功既畢靈運當遷是以構幽宮於淡路
シマニ、トコレクマチニミ、ヨカクシクマシキ
 之洲森然長隱者矣
亦曰伊弉諾尊功既至矣、徳亦大矣、於是
 登天報命仍留宅於日之隅
登テ天ニ報命ニシテ、ト、リマシヌ、ト、リマシヌ、ト、リマシヌ
 宮矣少宮此云倭柯美野
宮ニヤニ、少宮ニ、此ニ、云ニ、倭柯美野ニ
 ○高天原、天照大神の正身の在り幽冥を
 抱て白也○與姊相見而後云此相見ハ國の大君

就むの御心ふて白
ユカ、ト、頭生奉テ、其御兒ハ國を讓テ、其後己命ハ根國ハ
 此御兒生一の御誓ハ既ハ伊弉諾尊乃御心
レハ此、御兒生一の御誓ハ、既ハ伊弉諾尊乃御心
 也それ如此ゆりりし
ト、也、それ如此、ゆりりし
 其下云へし
其下、云へし
 紀ハ神沼河耳命兄神八井耳命と指て那泥汝命と
紀ハ、神沼河耳命、兄神八井耳命と指て、那泥汝命と
 宣ま繼體紀ハ長とよみ萬葉に名兄命とあり兄
宣ま、繼體紀ハ、長とよみ、萬葉に、名兄命とあり、兄
 姉とも通して云也○靈運當遷纂疏云靈運當遷
姉とも通して云也、○靈運當遷、纂疏云、靈運當遷
 者年運遷替也と云了今按ハ此字ハ薛道衡老氏碑

至道靈運神功自然。後漢書黃香傳。功滿當遷。たゞあ
るを取れる也。此ハ上文に隱身也とありと同一神
功既畢て今ハ幽々歸し坐時運の來れる意に用ひ
し。古訓ハ此四字をアツシと訓ふるハおほいけ
う。或釋云阿都之礼謂疾之危篤蓋熱癡之意也
と云る。此ハ叶ひし。○構幽宮於淡路之洲云云
幽宮と云。即現御身を隱して鎮る宮ふて幽冥宮
といふんが如し。本文に寂然長隱者矣とある文字
等も其意を以て書さる。神名帳淡路國津名郡淡
路伊佐奈伎神社。名神記云坐淡海之多賀とあり。此

を淡路と淡海と字も言も似し。故に混る。うや
思ふに舊事本紀古本云是以構幽宮於淡路之洲寂然
長隱矣。亦云坐淡海之多賀者矣。式亦近江國犬上郡
多何神社二座と有。此外此大神を祭れる神社帳上
卷十一葉右十三葉左廿五葉右廿八葉左二神下卷
四十八葉右四十九葉左六十五葉左六十六葉左五
十八葉右等に出。○登天報命云云始天神國修理の
勅命七代神たり惣係るれハ此紀中二神に
上りて是を省き茲にして其事を知せし。一の古
傳あり。○日之少宮。此ハ彼幽宮と別たるふあり。

始素交鳴尊昇天之時溟渤以之鼓盪山岳為之鳴响此則神性雄健使之然也天照大神素知其神暴惡至聞來詣之狀乃勃然而驚曰吾弟之來豈以善意乎謂當有奪國之志歟夫父母既任諸子各有其境如何棄置當就之國而敢窺窬此處乎乃結髮為髻縛裳為袴便以八坂瓊之五

百箇御統御統此云纏其髻髮及腕又背負千箭之鞞千箭此云與五百箭之鞞五百箭此云著稜威之高鞞稜威此云振起弓彌急握劍柄踏堅庭而陷股若沫雪以蹙散蹙散此云發稜威之噴讓噴讓此云而徑詰問焉素交鳴尊對曰吾元無黑心但父母已有嚴勅將永

孰乎根國。如不與姉相見。吾何能敢去。是
以跋涉雲霧。遠自来參。不意阿姉翻起。嚴
頽于時。天照大神復問曰。若然者。將何以
明爾之赤心也。對曰。請與姉共誓。夫誓約
之中。誓約之中。此云。字。必當生子。如吾所
生。是女者。則可以為有濁心。若是男者。則
可以為有清心。於是天照大神乃索取素

彘鳴尊。十握劍。打折為三段。濯於天真名
井。齧然咀嚼。佐我弥爾。加武。而吹棄氣。嘖
之狹霧。吹棄氣。嘖之狹霧。此云。浮。所生
神號曰。田心。次。湍津。次。市杵嶋。凡
三女矣。既而素彘鳴尊。乞取天照大神。髻
髮及腕。所纏八坂瓊之五百箇。御統。濯於
天真名井。齧然咀嚼。而吹棄氣。嘖之狹霧。

所生神號曰正哉吾勝勝速日天忍穗耳

尊次天穗日命是出雲臣也次天津彦根

命是凡川内直山次活津彦根命次熊野

櫛樟日命凡五男矣是時天照大神勅曰

原其物根則八坂瓊之五百箇御統者是

吾物也故彼五男神悉吾兒乃取而子養

焉又勅曰其十握劍者是素戔嗚尊物也

故此三女神悉是爾兒便授之素戔嗚尊

此則筑紫胸肩君等所祭神是也

○溟渤和名抄於保伎宇三文選詩穿池類溟渤○鼓

盪繫辭八卦相盪鼓之以雷霆○鳴响楚辭孤雛驚子

林賦山陵為之震動川谷為之蕩波登与美ハ萬葉尔

響動と書る字々如くそらきひくも也言の本也

言別ふ出已上ハ此神の健速く坐御威勢を量りて語

ふ此神の泣^キ路^ノと云^フて。青山^ヲ如^シ枯^シ山^ノ泣^キ河^ノ海^ノ
者^ハ悉^ク泣^キ乾^クとあり。皆古く語^リし人の辞^ナれど。かむうりも勵^ム
く云^フ。古語^ハ優^レれし所^也。○此^ハ則^チ神性^ヲ雄健^ニ使^フ之^ル
然^ル也^{ナリ}。此文^ハ右^ノ古語^ヲを解^ガさぬ人の為^ニ。又其^ノ後語^ニ
る人^ハけそんたる釋言^也。○勃然^ニ孟子^ノ○弟^ナ汝^ナ兄^ナたり。
男^ヲを称^スる辞^也。○善^心。こゝ善^心惡^心の善^心ふ^ハ非^レ下^ニ。
一書^ニに善^意。一本^作下^ニ。卷^友善^記ふ愛^友ともありて。
人の交^ハむつようは。異^心なきと云^フ。○有^奪國^之
志^歟云^フ。此^ノ間^ノの文^等ハ。皆現^レ世^ノ人情^ヲ移^シて。添^フ
たる辞^{とも}あり。素^言曰^ク。神^ハ日^と所^知し。素^言鳴^尊

ハ。黄泉^ヲを所^治れ外^ニ。別^ニに食^國と云^フ物^{あり}んや。
又神^ノの御上^ニ。其^ヲを奪^ハん。奪^ハれど争^ハぬ。
やうの慾^キ御情^ヲまゝんや。皆^ハ人間^ノの凡^情ふ比^シ
して設^ケし談^辭也。○父母^既任^諸子^云云^フ父母^已
有^嚴勅^云云^フ。此^等も同^ト談^辭なご。日^月神^ハ如^シ此^ノ
伊^弉冉^尊と。母^と申^ルる多^ク。古^人の詞^ヲと思^フ
へき也。記^スふハ。妣^國根^之堅^洲國^と有^{。○}窺^齋漢^書に^也
○結^髮為^髻云^フ。上^代女^ハ放^髮ふて。年^長て髮^ヲを
げ本^ヲを結^テ末^ヲを垂^キ。男^ハ頂^ル左右^ニ所^ル結^縮き
此事^記及^續紀^等ふ出^ル。古^事記^ハ解^御髮^とあり。古

大く違ふやうなれども。解とを。此本結を解たり。此
紀の結ハ。そを男髪と結成たり。記ハ左右の御美豆
羅と云る是也。神功紀ハ。息長足姫尊。檀日浦ふて。御
髪と解し。海ふ入て洗ひ。はく占ひ。孫ふに。髪自分れ
たり。と。そのまゝ結て。美豆羅と。孫ひ。も。假ふ男
の良と。なり。孫ふにて。此と。一例あり。崇峻紀ハ。古俗
年少兒。年十五六間。束髪於額。十七八間。分爲角子。今
亦然之。とある。此。角子。即髻也。萬葉に。角髪とあり。左
右に角の如く。故ふ。角髪とを。書る也。美豆羅と。
組蔓の義也。後世に。鬢頰と云ハ。音便の訛也。此史倭

人傳云。男子無髮於兩耳上。至隋其王制冠。戒菴漫筆
曰。倭國婦人。髮長散。在後。○八坂瓊云。八坂長八尺
ふて。瓊と緒ふ貫記。其長と大抵ふ云語。五百箇
は。其瓊の大概。御統の御ハ。例の真ふ通ふ美賞
辭。統ハ。括統たりと云て。纂疏ハ。以絲貫穿。総括之也。
と云るが如し。延喜竟宴歌ハ。須波留乃多麻和名抄
ハ。昂星。とある也。此星の聚たりと云也。
天門冬と。須麻呂具佐と云も。其根ふ屬る。萃の緒ふ
貫きたる。如くして。聚るを以て云也。萬葉十ハ。水良
玉五百都集乎。解毛不見。思良王能伊保都都度

ヒヲテニハスビ。十六ノ。吾宇奈雅流珠乃七條。ちと
も。く。海人子まもも。懸頭ウチケシ。ゆふよみ。く。と。見
れ。古へ。な。へ。て。お。人。乃。飭。り。し。中。ふ。も。貴人ウキヒト
を。殊。更。なり。つ。れ。ハ。此。ハ。尊。き。御。装。ひ。方。に。云。る。也。
猶。此。ハ。坂。瓊。の。り。ハ。ち。や。く。物。ふ。也。難語并へて。其。圖
をも。考。へ。置。け。れ。と。近。来。を。彌。真。明。日。耀。玉。な。り。と。云。こ
や。と。よ。い。説。と。して。賞。け。り。と。は。ち。に。い。て。い。く。く。の
く。や。わ。る。也。と。し。三。種。神。寶。中。ハ。八。坂。瓊。も。其。御。形。ハ
右。ふ。准。へ。奉。る。べき。な。れ。ど。其。神。寶。ハ。伊。井。諾。尊。の。御
頭。玉。ふ。坐。り。て。記。ふ。御。倉。板。舉。神。と。崇。り。たる。是。なり。

其より下は精く弁ふべし。○纏。其。髻。鬘。及。腕。如。此
頭。髮。手。腕。ふ。玉。を。纏。く。や。古。の。風。ち。り。萬。葉。廿。九。阿。母
也。乃。自。母。多。麻。尔。母。賀。母。夜。伊。多。太。伎。豆。美。都。良。乃。奈
可。尔。阿。救。也。麻。可。麻。之。母。三。泊。瀬。越。女。我。手。二。纏。在。玉
者。云。云。是。玉。手。玉。釧。玉。等。如。し。但。玉。を。纏。く。や。を。
男。に。限。る。に。も。あ。ら。ん。又。健。き。備。ふ。し。う。く。に。此。ハ。尊。く
嚴。む。御。見。と。示。さ。ん。く。り。に。故。り。美。き。玉。と。し。と。
御。髻。御。手。に。纏。路。ふ。よ。ふ。云。る。也。○子。箭。和。名。抄。篋。箭。竹。
名。也。と。有。子。篋。入。の。義。也。萬。葉。に。笑。篋。等。と。能。の。假。字
に。用。ひ。後。世。軍。書。ふ。乃。ぶ。ら。に。射。と。と。も。篋。深。ふ。て。

矢幹ヤカラの深く徹トホると云也。記ふ名。千入チノリ之鞞ノユキとあり。
○鞞シ鞞シ作ルハ本誤トなり。口訣直指等の本に鞞シ作ル。
是なり。鞞シハ鞞シと同クて義別也。字書鞞シ箭室也。推古
紀ニ鞞シ此ニ云ユ由岐ユキトと名ゆ。弓筈ユゲの義なり。し。字鏡シ
也。奈久比ヤナグヒ和名抄ニみそ。箭ヤナグヒ夜奈久比ヤナグヒとあるハ。轉シし。也。
○稜威シ漢書李廣傳ニ威稜シ潘岳カ誅ニ稜威シ可厲シ言ハ勢イキモチの
伊イ之ノ千早振チノハヤの知チと重ナれり。なれハ。伊都イと清スミし。神
武紀ニ云ユ伊イ途ツとあるとけ。義別也。○高鞞シ記シ
竹鞞シ作ル。此字字書ニ見ル。字彙補ニ云ユ音未詳シ見ル
呂氏春秋ニ今按ル。字彙補ニ出ル。ハ。鞞シ字也。然レ見ルハ
鞞シ漢土ノ書ニ無キ文字ト見ル由レハ。新

字和名抄ニ鞞シと止毛トモと訓スハ不當ラ。鞞シハ今ノ箆手コテ
なり。即射鞞シと同物ナリ。不可混ス。大神宮式ニ云ユ鞞シ以テ鹿
皮ヲ縫ヒ之ヲ。胡粉コ塗リ以テ墨ヲ画ク之ヲ。納メ持麻マ筈ケ二合ニ。徑リ一尺六寸
五分。深サ一尺四寸五分。著テ緒ヲ一處ニ用ヒ紫革ヲ長サ各々一尺七
寸。廣サ二分と有リ。今ノ神寶ハ其形ニ如ク瓢ノ。黑漆ヲ以テ銀粉ヲ画ク
巴紋ヲ表裏各々一なり。江次第ニ鞞シ繪ト云ユ出雲風土記ニ
云ユ須佐能乎命ノ御子磐坂日子命ノ國巡行時ニ至リ坐テ此處ニ
而詔ク此處者國推美好有國形如画鞞哉ト。郷ト下ニ云ユ云
握ルハ神代ノより鞞シ繪ヲあり。云ユ云ユ吉部祕訓抄ニ等
に繪ク云ユ云ユ却テ疑ハし。彼伊勢神寶ハ其遺物ナリ。然

らけ^{トモ}巴ハ水のうづまく形を表と云々。巴字ふ依て
云^ヒ出^ルる^ウ。新井氏ハ鞞ハ古ハ竹を以て作^リる^ル也。鞞ハ皮を以て
やと云^フ。此説ハ竹鞞字に依^ルる也。鞞ハ皮を以て
作^ル故^ニ。續紀^ニ其^ノ工^人を鞞張^トと云^フ。或^ハ云^フ鞞の内
へ破竹を入^テ張^リ置^バ。よく鳴^トと云^ヘ。又高竹共^ニ
多^ク計^シとよ^ミ。健^ク鞞^ヲなり。其^ノ所以^ハ。稜威と云^フ語^ハ事^ヲ
ふのみ云^テ。物^ヲ云^フ例^ナ。と。此説^ハ従^フへ^シ。さ^レ
鞞^ヲ左^ノ臂^ニ着^ケ。袂^ヲ抑^ヘ。弓弦^ヲと避^サ物^ヲなり。故^ニ
弦^ノあ^リる^音あり。萬葉^ニも鞞^ノ音^ヲをよ^ミ。伊勢^ノ神
託^ニも此^ノ言^ハあり。

然^レ是^レども音^ヲを以て歎^ト威^ハ物^トして。其^ノ名^義と
も音^物ハ上下^ノ畧^也と云^フ説^ハなり。い^ハう^ハあ^リる^レ
さ^レは^レの音^ヲ為^スべ^シ。う^ハう^ハ此^ハ高^ノ鞞^トと云^フ。音^ノ
高^キき^キとえ^ル。う^ハう^ハの説^ハに^ハう^ハか^クて^ハ此^ノ鞞^ト
と云^フ物^ハ。中^古以^来ハ。纒^ルふ^奉ふ^纏ひ^着る^物とな
り^来し^ハ。あ^リる^レぬ^ハに^ハある^レ。近^年著^ハせ^ル。某^ノ
書^ニ。鞞^ノ圖^とあり^し。出^セる^レ。古^ハに合^ハへ^ル。一^ツも
なし^シ。其^レを以て。右^ノう^ハう^ハを疑^フへ^シ。
○彌。和名抄^ニ由^美波^敷字^書彌^弭也。又弭^ハ弓^ノ梢^末也。記
ふ^ル弓^ノ腹^ハ作^リる^レ。萬^葉十^三。梓^弓弓^ノ腹^振立^とあり^し。
此^ノ腹^と云^フう^ハと心得^テ。う^ハて^ハかく^テ書^クる^レも。弓^ノ腹^と
う^ハ入^ル多^クう^ハと。腹^と書^クる^レハ。由^婆良^と訓^ハし。即

弓張の義ふて、弦を張、始る處と云。十一ふ。丈夫之弓上
根起云。是ふ弓上と書る其意也。彌弭も、弓、梢末也
とありて、其、梢末をうらむ處なりハ、弓上と書ると
意を一つなれと言ハ別也。萬葉一ふ。梓能弓之奈留弭乃
音為奈利とあるに據て、波受とよむべし。○急握劍柄
多賀美とも。多賀比とも云。前章に出、日向風土記
云。昔者自天降神以御劍柄置於此地因曰劍柄村後
改曰高日村。萬葉九。燒大刀乃手穎ちとあり。登利志
婆流ハ、取縛ふて、握み結ると云。今柄と云も、握むの
畧也。急字とるへくも、緊と同一く、堅く握むより

なり。○陷股。股ハ記又式、祝詞云、向股とあり、兩股相
對ふ故云。陷ハ記云、踏那豆美とあり。陷ハ踏穿意
あり。那豆美ハ、記、倭建命、御子等、御歌云、阿佐士怒波
良許斯那豆牟萬葉十三。夏草乎腰尔莫積なりとある
と同一く、腰まで踏没なり。何れも甚勇健坐貌と申
せる也。此を上代、天皇、まゝ王公君達の事とある時
の、武備の形状を摸して云なるべし。いと古き時より
乃談辞とあるて、言うる優れを愛し。○蹶。垂仁紀、人
名ふ。當麻蹶速まゝ字音け計と、久惠と云くや多し。
○般。島貢厥土壤。萬葉廿。安麻乎夫祢。波良々尔字伎

互新撰字鏡ふ。毳波良々介志。又知留とて有て言の
意ハ同しき也。○雄詰記ふ。男建中巻ふ萬葉九ふ。牙
喫建怒而十一スラヲノオモヒタ丈夫乃思多雞備互祝詞尔。荒備給比
建備給事無タケヒコトナクと有。猶此雄詰と云く。神武紀ふも。
景行紀はしる由。此ハ雄としく。健ひ孫ふしなり。
○嘖讓。後漢書責讓。廣韵。嘖音責大。呼聲也。小爾雅云。
詰責以辭。謂之讓。萬葉十四東歌ふ。母尔故呂波衣云云。
○徑。古訓。タハニとふみ。これと意得ふし。記ふ待と
あれハ。此も一待の誤うと。姑くはちとふみ。
○詰問。漢書王嘉傳。史記注。詰。責問也。○素交鳴。尊云云。

是ふと。文の表と。裏とあり。表ハ根。國へ適坐てふ。
天照大神に見え奉る。や能はざれハ。遙く罷請ふ
參上り給ふに。如此とがら孫ふるよのま。其裏ハ己
尊。今ハ黄泉に。り孫ふに就て。是ま。所知食来
し。此中國ハ大君を顯出さる。御誓の為ふ。
參上り給ふと也。此ハ既ふ。四卷。末。○黑心。又濁心。惡
心ともあり。袋草紙。或ハ金葉集。なぐに。腹黒と云ふ。又
邪心キナキとしひる。皆赤清アカキヨき心ふ。對て云。○跋涉。詩。廓風。
注。草行。曰跋。水行。曰涉。○參。通鑿云。北齊高暹彦至。明
欲參胡三省注。參朝參也。○阿妙。阿音過。李商隱詩。階

前途阿姊。○嚴顏文選。○赤心。後漢書光武紀赤心。古
事記清明心。仲哀紀明心。祝詞宣命。○天照大神云云。
是も素尊の言をうけて。若其如くちんも。何を
以て其虚實をさしん。と詔ふりの談辭也。昔伊勢大御
神ハ寮頭相通が詐を答。以て妻子從類共ふ十人
伊豆嶋へ流させ給ひ。ハ幡大神ハ道鏡が隱謀を既
く察せらして。豫め天皇於御側なる尼法均ふ告。知
せ給ひ。類ふ合はさる。以てし知へし。○誓約之
中必當生子云云。此御誓の國大君御顯出の爲なる
る。猶い。上文伊弉諾尊御生子條に御言に何

不生。天下之主者歟。と宣賜て。此大神等を顯出し給
ひ。又御事任條に素戔嗚尊者。可以治天下。と詔ひ給
は。即此尊を天下の主に座て。此御時まで。此國を
領知ておろし給は。黄泉の御事任も又重られん。
此中國の未終の大君を顯出するを。己命ハ黄泉へ
罷らんとて。天照大神御許より。昇らせ給ひし。こ
著明し。されば次一書ふ。必當生男矣。如此則可以使
男御。天上云云と。又一書ふ。上畝三神。宜降居道
中。奉助天孫。而為天孫所祭也。と。此等を合せ
て。記傳の非を悟るへし。○天真名井。名義ハ真魚井

ふて、天真魚咋ナガヒの真魚マナヒと同一。倭姫命、世記云、從丹波、
國余佐郡ヨサノ真井原マナノ奉迎ホムムカヒ止由氣皇大神トヨキノミコ云云。式丹後、
國丹波郡タニハノ比沼麻奈ヒノメナ為神社ミヤ。出雲意宇郡イツノ真名井マナノ神社ミヤ。此
等七皆神カミ。御饌ミケ炊カキくより出デくも也。一書に、天アメ、濟ニギハヤヒ名井
とあり、轉也。○十握トウカ、劔ツルギ云云。八坂瓊ヤシロ云云。此劔ツルギと瓊ツルギと
を形容に設けしむ也。ふて、天照大神の御物實ミモノノが男
御子ミコ。素尊の御物實ミモノノが姫御子ヒメミコと云、のみが、一部貫き
たる本傳ふがあり。故ユヘ、詰然ツギニ咀嚼カミ而吹棄フキスルたると云う如
き、幼言コトコトして語カタル了紛マシらしたるあり。ふて、よくも
思ふと、此御時の御誓ミカケや、阿米アミと夜見ヨミと、深コソ甚シ微カサ

妙なる神量カミノリキあり。ふて、誰聞タレキコたりて、誰タレあり。傳へ
む。畢竟幽冥コソコソなる。ふて、うら、わ、海幼言ウミコトコト。漆シ言コトして填ウレり
さるるものには、さるるハあれ。○氣噴キフキ。息吹イフキの意也。萬葉七マンヤクシチ此
小川コガハ白氣シロキ結ムス瀧タケ至ニ八信井ヤチノ上ノ事コト上ノ不セ為ト友トモ式シキ張テふ。近
江國坂田郡サカタノ美濃國不破郡フナトクノ伊夫伎神社イフキノ。○田心タノ姫ヒメ御
名ナ義ミナト下ノ一書に、田霧タキリ姫ヒメと有。激霧タガキリの意歟。○湍津タギツ姫ヒメ御
名ナ義ミナト字シの如く、真名井マナノの水ミヅに、瀧タケ流リる。意歟。說文セツブ云、
湍タギ疾ハヤシ瀨セ也。前漢書溝洫志コウハンシコウコクシ注チ云、急流也。○市杵イチキ島シマ姫ヒメ御
名ナ義ミナト令シ所シヨ齋イハヒ比ヒ意イ也。下、一書に、奉助ホムタケ天孫アマノミコ而シテ為シ天孫アマノミコ所
祭イハヒ也。とあり。是也。此三神の御更ミカガヒ下に合せて申マウべし。

○正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊ニサカアカフカチハヤヒアメノオシホミ此尊號ハ天狭田長チハナカ
田の稻穂穂以て稱へたるあると吾勝勝速日と云ふ
就て素戔鳴尊ヒコカサ吾勝ヒコカサぬと云方に託コトヨをて即て荒振
孫ヒコよまに語コトをぬヒコくもの也其ハ下卷天降段
一書曰天忍穗耳尊以降之是時天照大神中畧又勅
曰以吾高天原所御齋庭之穂ホ亦當御於吾兒ヒコとて持
しり孫ヒコよヒコしり次ヒコし皇孫火瓊杵尊ヒコ穂ヒコ饒々ヒコの意
彦火火出見尊ヒコし日子穂々出實ヒコれ義以て皆稲を以
て稱奉れりヒコに合ヒコて知ヒコしされハ今此尊号も先初
七字ハ上文保食神條ヒコふ乃以粟稗麥豆為陸田種子ヒコ

以稲為水田種子又因定天邑君即以其稲種始殖ヒコテ
天狭田及長田其秋垂穎ヒコ八握莫々然甚快也とある
是齋庭之穂始ヒコなりこれハ此意を以て稱へたるよて
即正哉班班速生天押穂ヒコと為ヒコるぬと云意也然ヒコすと
素尊ヒコれ吾正ヒコく勝ぬと云方に取ヒコちりし彼彦火々
出見尊ヒコとも火中ヒコしり生出ヒコ孫ヒコよまに語ヒコをせヒコく同
例也猶以類のヒコれられ有て中ヒコハ本實の覆ヒコえられ
ぬ如くぬヒコるもあヒコるハ談辭の巧也○天穂日命ヒコ此御名
も穂生の義也ヒコ此ハ日隅宮齋主とヒコなり孫ヒコよ故ぬヒコる心
し神名帳上卷六葉ヒコ右下卷四十五葉ヒコ右五十二葉ヒコ右

五十三葉 右等亦出。○出雲臣記云、出雲國造と有、
穗日命の出雲に留り、孫人等、下卷に出、其處云
委く云云。○天津彦根命、伊勢國桑名郡多度神社名
大とあり、此神と齋へる也。姓氏録云、桑名首者天
津彦根命、男、天久之比乃命之後也。○凡川内直、凡
安閑紀、推古紀等に、大河内と有、倭京にて山代、大河
の此方、在國なれ、然云、和銅四年、國郡と二字亦
定られし時、大字と省り、直ハ、代兄の義なり、
し。○山代直、後紀、延暦十三年十一月詔云、此國山河
襟帶自然作城、因斯形、勝可制、新号、宜改、山背國、為山

城國。○活津彦根命、活穢生産日等、活也。近江國蒲
生郡彦根命神社是也。式ふ、不載。○熊野櫛樟日命、御
名、義、幽冥、靈異といふ、如し。此御名に、黄泉と、天と
の靈異なる、御誓以て、國大君と顯出し、坐る、由縁
と、稱へ遺せるなり。され、此神ハ、即此度、神量乃
證に、立於、小が、如くなり。上なる、天、磐楸樟船神、御名
亦、准へて、知へし。一書に、大隅とも、忍隅とも、有、式亦
出雲國意宇郡志保美神社ハ、此神と祭れる也。一書
亦、熊野忍詣命とあれハ也。○原其物根ハ、坂瓊云云。
此物實と、神行と、と思ふに、天照大神ハ、御父の如く、

素戔嗚尊ハ御母の如くして天津日嗣乃皇統の定
りたりける奇きうも貴きうも○此三女神云云又
此三柱神ハ素戔嗚尊と御父の如く天照大神と御
母の如くして顯出せしめたる也かくて此神より乃皇
孫亦忠誠なりと大國主神の食國を作らざらんとして
以て素戔嗚尊の本より乃の篤き御心を知はべし
○胸肩君等所祭神是也記ハ胸形和名抄ハ筑前國
宗像郡加多奈筑前國風土記云宗像大神自天降居崎
門山之時以青麩玉置奥宮之表以八尺紫麩玉置中
宮之表以八咫鏡置邊宮之表以此三表成神体之形

納置三宮即隱之因曰身形郡後人改曰宗像とあり
三宮のふハ一書の方に委く云々姓氏録云宗形朝
臣大神朝臣同祖吾田片隅命之後也大神朝臣素佐
大國主又神別宗形君大國主命六世孫吾田片隅
命之後也と有本君け尸ちうして天武十三年朝臣
ふちうとる見此三宮と此氏人け以祭由志と舊
事本紀云大己貴神宗像奥津島坐神田心姫命娶生
味鉏高彥根神又邊津宮坐高津姫神娶都味高八重
事代主神生此事代主神化為八尋熊罴過三島溝梳
女活玉依姬生天日方奇日方命此神五世孫阿用賀

田^タ湏^ス命也。かれハ邊津宮坐神ハ事代主命の御母
ふて。曾形氏の遠祖母神也。續紀十或ハ十三等ハ宗
形朝臣鳥麻呂大領ふて宗形神主とちるる事也。又
後紀ハ延曆十九年十二月勅に彼大領として神主
と兼るる事と傳られ。又此神主の任六年を限り相替
こせを云へり。式ハ筑前國宗像郡宗像神社三座三
代實錄十七貞觀十二年二月奉幣告文云我皇大神
波掛毛畏支大帶日姫乃彼新羅人乎降伏賜時亦相
共加力倍賜我朝乎赦賜比崇賜利而今如此抑
侮氣色乎露出事波最是皇大神乃聞驚支怒悲利賜

倍岐物利奈とあり宗像社記云鎮坐于此處者為防異
賊也云云義楚六帖云日本國古今無侵奪者龍神報護
神名帳上卷十四葉右下卷十三葉右四十五葉左三
十九葉左六十葉右七十二葉左

○此段の大意ハ大御祖伊特諾尊ハ神勅ふして既
尔天黄泉の君主ハ定まると豊葦原中國ハいま
ハ長代の大君坐させられハ素戔嗚尊暫く相兼て天
下を所治行來ぬ事ありと吾ハ黄泉にさうりて
陰より皇御孫尊ハ御食國とし作らしむる事あり
事れハ天照大御神此事と白さんとて天ハ參上

と云々。爾天照大神と素戔嗚尊と。幽顯の靈妙
神量の御誓して。即國大君神及天日嗣以守護神。又
奇神行の御徴の神と云々。顯生しとへて。遠き代迄
乃明證と云々。其神と云々。ハ云云と云々。本傳
と。幼談の爲に。作意しと云々。ハ普く人の知るる世なれば也。

一書曰。日神本知素戔嗚尊有武健陵物
之意及其上至便謂弟所以來者非是善
意必當奪我高天原乃設丈夫武備躬帶

十握劍九握劍八握劍又背負鞞又臂著
稜威高鞞手捉弓箭親迎陽御是時素戔
嗚尊告曰吾元無惡心唯欲與姉相見只
為暫來耳於是日神共素戔嗚尊相對而
立誓曰若汝心明淨不有陵奪之意者汝
所生兒必當男矣言訖先食其所帶十握
劍生兒號瀛津嶋姫又食九握劍生兒號

湍津姫タギツヒメ又食カクテ八握ヤシセル劍コノ生兒ナシセル號ミナハ田心タゴリ姫ヒメ凡ナニ三ミ
 女神ヒメノカミ矣ナリ已カクテ而素戔嗚尊スサノヲ以其頸ヲカノヒノカミ所嬰シタマヘル五百イハ
 箇御統ツミ之瓊スニルノ濯タミ于天渟アノノ名井ナ亦ナ名ナ去來カ之ノ
 真名井マナナ而食シ之テ乃生兒ナシメル號ミナハ正哉ニサカ吾勝アカツ勝ハヤ速ハヤ
 日天ヒアノ忍骨尊オホネノ次天津彦根ニ命次ニ活津彦根ニ
 命次ニ天穗日命ニ次熊野忍オホ踏命フミ凡ニ五男神ニ
 矣故素戔嗚尊キ既得エタマヒキ勝驗カチノ於是日ニ神方ハシメテ矣ナリ
スヘイイツバシラノヒコミコアミシ

素戔嗚尊モトヨリ固無コト惡意キ乃ナ以ヨ日ノ神オヒニセル所生マハシラノ三女ヒメ
 神令カミ降クダシタ於筑紫洲ツクシノ因教シメニ之曰カレノリ汝三神タミハク宜降イニシ
 居道テ中奉助タスケテツリテ天孫アガミコヲ而為マタアガミコニイツカレタミヘトノリ天孫祭也ヒキ
スガノハシメヤフルユキノ

○陵物之意云云ハ陵ハ凌ト同シ萬葉ニ菅葉凌零雪ハシメヤフルユキノ
 真木マキ葉凌零雪ハシメヤフルユキノ秋芽アキハ子ガ師シ努ヌ藝ギ鳴鹿ナクシカ毛モ々々
 塞サヤ了物ヲと押分シ押伏セても漏入クキイリ分ケ通スるやうの
 意コトに云フ了ル晉書ニ周嵩傳ニ每ニ以ニ才氣ヲ陵物ヲ今俗ニ尔ル寒暑ト
 凌トくト云フ也ナリ其ノ中ノ一ツつクりコト此ノ防キ七ナカメ省シ毛シ為ル於ヘ
 とも猶其ノ惡行ヲと強クて物ヲし於ヘ方ニ云フ云フ此ノ一書ヲ也ナリ

るほくちうりなれば素戔嗚尊と稱は御名とも省て
其と云るちうりなると今世れ心ふてそ其御名なく
てそ自他の差りなきが如おもふれど上代此御誓
々天照大御神の皇統を傳へて國に大君と顯出坐
神行と固く定めて古傳舊辭の常談なりつとてい
ひふ省きて語るも聴誤る人あはげりしきに甚
しく省るるもあはげりしに彼總論ふ引つる大被詞
ふ云云天降依志奉支如此カ久依奉志四方之國中
此大倭日高見之國乎安國止定奉氏と云るかくて
と磐石余彦天皇の天降るにゆるしやうなれど然るが

るしう誰とぬ人もあはげりしにわらう瓊杵尊と
り三御代の間けりともハ省る也今此皇緒も其と
同しく天照大御神の御物實が男子素戔嗚尊の御
物實が女子とせおしるへて心得りしう其物實
の主と畧して彼行粧の方を加へるふぞある
事ありふらう舊辭故稀ふハ免ぶらうしと語りし
と與とせしぬるへし然るにゆるるふ次くふも多う
若此省文と答てかくてそ吾皇緒ハ素戔嗚尊御胤
なるみやと思はん人そ彼大被文と名て神武天皇
直に倭國ふ天降るにゆるしみやと思はんが如しそ
又其を承て是と難せんちうりなれあはげりや

神量^ナなるを^レ得悟ら^ズぬ^ルなり^ニ思^ハ曲^カり^ナり^ト又^テ天
孫^ト皇孫^トと^ル御稱^ナの^レ差^トを^レ考^ヘら^ズも^ト疎^カり^ト也^ト此^ノ
天孫^トある^ニ天^ノ神^ト御子^トと^ル申^レら^ズや^レハ^ト即^チ天^ノ忍
骨尊^ノ御^ト也^ト又^テ皇孫^トと^ル云^フ皇統^トと^ル受嗣^セ孫^ト
御子^トと^ル云^フや^レ已^ニ而^テ瓊^ノ杵尊^ハ天照大神^ノ御孫^ト
ふ^レ當^ラせ^ル孫^トに^テ行^キて^モ更^ニ皇^ノ御孫^ト尊^トと^ル申^レ尊稱^ト
出来^テり^ト其^レを^レ約^シて^モ皇孫^トと^ル申^セる^も多^クなり^トぬ
且^ニ天孫^ノの^レ孫^トと^ル御子^ノの^レ意^ニして^モ孫^ノの^レ意^ニは^レ非^レ
され^ハ此^ノ紀^中に^テ天孫^ハ天^ノ神^ト御子^トと^ル申^レ處^に用^ヒ
皇孫^ハ天^ノ日嗣^ト御子^トと^ル申^レ處^に用^ヒ其^レ差^ト慥^ニあり^ト

今本等に稀^ク此^ノ差^トを^レ亂^スる^もある^も其^レ心^ニせ^ぬ後
人の^レ何^レ是^レに^テも^ト同^シし^トと^ル心得^テ寫^シし^レら^ズや^レ
なり^トされ^ト其^レ心^ニして^モされ^ハい^ハく^レ分^レれ^ル物^トを^レや^レ

又^テ髻^ノ華^ノ山^ノ蔭^ニ云^フ書紀^ノの^レ此^ノ一^ノ書^ヲ傳^ヘハ^ト劍瓊^各
御自^ノの^レ物^ヲ因^テ兒^坐也^ト此^ノを^レ亂^ス誤^ル
れ^ル傳^ヘら^ズし^ト知^ル此^ノを^レ天^ノ皇^ハ大^ノ御^ノ祖^ト素
戔^ノ鳴^ノ尊^にして^モ天^ノ照^ノ大^ノ神^ハは^レよ^クい^ハれ^ルか^ス
亂^レし^レ傳^説と^ル此^ノ書^に載^レら^ズる^も何^レなり^ト
と^ル云^フ是^レと^ルされ^ハ此^ノ人^も劍^と天^ノ照^ノ太^ノ神^ノの^レ御^ノ物^ト
瓊^と素^戔鳴^ノ尊^の御^ノ物^トと^ルえ^ルなり^トい^ハふ^も目
惑^ハせ^レに^テあり^トん^トば^レ古^ノ書^に明^レる^も人
の^レ彼^ノ畧^ノ法^ニも^トあり^トなり^ト

亦名、田心姫、九握、劍、化生之神号曰、湍津嶋姫、命、八握、
亦曰、田霧姫、
劍、化生之神号曰、市杵嶋姫、命、

まゝ、卷三云、素戔嗚尊、與天照大神、此ハ素戔嗚尊、
譜ハ就テ如此ハ

申セリ、共誓約則所生三女、是爾兒号、田心姫、命、亦名、

奥津嶋姫、命、坐宗像、與津宮、是所居于遠瀛嶋者也、次、

市杵嶋姫、命、亦名、佐依姫、命、亦云、中津嶋姫、命、坐宗像、

中津宮、是所居于中嶋者也、次、湍津嶋姫、命、亦名、邊津嶋

姫、命、坐宗像、邊都宮、是所居于海濱者也、已上三神者天

照大神、所生三女之神、是汝兒也、因授素戔嗚尊、則降

於葦原、中、國、宜降居於筑紫、國、宇佐嶋、在北海道、中、号

曰、道、中、貴、とある、此等、中、此、紀、の、此、一、書、と、舊、事、本、紀

二、卷、に、傳、へ、と、宗、像、社、記、と、貝、原、氏、筑、前、風、土、記、と、相、合、

れ、ハ、奥、津、宮、ハ、田、心、姫、命、中、津、宮、ハ、湍、津、姫、命、邊、津、宮

ハ、市、杵、嶋、姫、命、と、定、め、へ、し、奥、津、嶋、日、記、此、書、ハ、筑、前

青、柳、種、麻、呂、ハ、奥、津、嶋、宮、の、所、
人、に、在、り、ち、ろ、の、時、の、紀、行、也、
云、云、と、其、沖、津、宮、ハ、今、沖、島、と、云、嶋、は、中、津、宮、

又、四、十、八、里、西、北、と、獨、遠、く、離、り、中、津、宮、ハ、今、大

嶋、と、云、嶋、は、神、湊、と、云、處、り、三、里、許、北、の、海、中、と

あり、邊、津、宮、ハ、今、田、嶋、と、云、嶋、は、中、津、宮、り、三、里

南、ふ、ろ、ろ、と、云、了、か、く、て、道、中、又、宇、佐、嶋、等、の、り、ハ、此

稜威道別

卷末の文に就て云へし。

○此一書の大意ハ全談辞のうちに云へし。素尊の健速してハ物實れ疑ひたる也。日神おねてより素尊の健速して物と陵ぐ御心おすすを去らせし故此より昇り来坐に由をハ必以善御意おけらるる也。蓋吾高天原と奪ひ取んとし孫おなると。さらば女神おつとも丈夫の行装をなして彼神の出来に負じとて御身に十握九握八握劔を帶し。是文にて素尊の武備を知り劔を帶て来孫故其負じとて同背に鞆を負く三劔を帶して對ハせ孫およしとて御手に弓矢と取して御自待ハし臂より高鞆をけけ御手に弓矢と取して御自待

むうへ防がせ孫。此時素尊吾ハ惡心ありし。姉尊と誓て御子生まらんとておそ參来はれと申し孫。於是日神。本より皇統無てハならぬ御子なせ孫よ。もし汝が心明くして奪ふ心ありは汝が生かす。兒ハ必男子おとすと詔て素尊の所佩る十握劔を食て生坐る兒号ハ云云。九握劔を食て云云。八握劔を食て云云。三女神を顯生坐き爾も素尊。天照大神。嬰がせ瓊と食て生孫へり兒号ハ云云と。五遍にして五男神を顯生孫ひき。是則素尊の固了のほへの如く日神の御物實らる。天孫と生得

乃んはれハ日神も其誠なる御心とありて素尊
の物實なる三女神と年経てのち筑紫に降ちりて
誨し乃んはれ汝三神其國の北は海の道中に天降居
て吾天孫と助け奉り又天孫に齋れよと告し乃ん
きとたり。

是にて劍瓊の省き状とよく聞わきとる
世ふ此誓ハ素尊の御心は明き闇きを所知
まはして御子生さんとてあそはると云ふ
そらく心の談辭のまに沈酔して神典の本義に
うとた心そうし上は諾再二尊の御誓も專御子
顯生坐ん御為なるものなり。

一書曰素戔嗚尊將昇天時有一神號羽
明玉此神奉迎而進以瑞八坂瓊之曲玉
故素戔嗚尊持其瓊玉而到之於天上也
是時天照大神疑弟有惡心起兵詰問素
戔嗚尊對曰吾所以來者實欲與姊相見
亦欲獻珍寶瑞八坂瓊之曲玉耳不敢別
有意也時天照大神復問曰汝言虛實將

何以為驗對曰請吾與姊共立誓約誓約
之間生女為黑心生男為赤心乃掘天真
名井三處相與立是時天照大神謂素戔
鳴尊曰以吾所帶之劍今當奉汝以汝所
持八坂瓊之曲玉可以授予矣如此約束
共相換取已而天照大神則以八坂瓊之
曲玉浮寄於天真名井嚙斷瓊端而吹出

氣噴之中化生神號市杵嶋姬命是居于
遠瀛者也又嚙斷瓊中而吹出氣噴之中
化生神號田心姬命是居于中瀛者也又
嚙斷瓊尾而吹出氣噴之中化生神號湍
津姬命是居于海濱者也凡三女神於是
素戔鳴尊以所持劍浮寄於天真名井嚙
斷劍末而吹出氣噴之中化生神號天穗

日命次正哉吾勝勝速日天忍骨尊次天
津彦根命次活津彦根命次熊野櫟樟日
命凡五男神云爾

○羽明玉神下、一書云玉作遠祖伊弉諾尊兒天明玉
云云姓氏錄云玉作連高魂命孫天明玉命之後也舊
事紀云高皇產靈尊兒古語拾遺神武云櫛明玉命之
孫造御祈玉其裔今在出雲國每年與調物貢進其玉
とある皆同神なりし羽ハ映ハエの畧なり○兵ハエいくさ

云言の意ハ言別ふ出○瀛ハ海也遠字を加へて於
伎と云天皇御名ハ於伎と云るも其意なるへし
○珍寶云云珍ハ上の貴王條ふ出瑞ハ艶々々美麗
き意也八坂瓊の名義を既ふ云つ曲玉のくやも少
しハ云はれど猶いそい曲と云貫統たる玉論を縮
ぬるる形ふ就て云稱也一顆形の曲るるを非は
彼仲哀紀ハ天皇如ハ尺瓊之句一以曲妙御宇とある
壽詞の意も即如環無端と云譬の類ふて括て旋し
たる玉は始もなく終もあはれ意以て奉賀する詞也今
乃人れ心ふてハ旋ると句るとハ別の如く思ふる

と。彼、^{ニカリ}糒餅と云物し。其形の旋^カと云。名とな
りて。即長き玉、緒と^{ワガ}縮れし。か如き物なり。倭名鈔
云。糒餅形^カ如^カ藤葛者也。和名葛加利とありて。類聚名
物考雜十四圖式、部に。其古圖と出せり。披見て知べ
し。其原ハ玉、緒と縮れし。形^カ象^カるなり。へし。然る
ふ。勾玉と書ゆ文字に拘泥^{ナツミ}て。右の仲哀紀、文と一顆
の玉、曲^カと云。證^カ引^カし。も當らば。又附會の説
とほけし。七曲^カの玉、類^カひ^カなり。云。皆
いふし。きひ^カが^カど。又記傳、再考、説谷川氏の勾玉考
等の。益々非^カなり。上註の辨^カども。ふて。自然と悟^カる

なん^カと^カぬ^カ。○以吾所帶之劍^カ云。新^カしく^カ希^カ見^カく
語らんとて。劍と瓊とを^カり^カえ^カたり^カなり^カ。此傳
ふて。劍が天照大神の御物實。瓊が素戔嗚尊の御
物實なり。元より幽冥の神量。誰知へきなり。ぬ^カ。何
かに云も。談辭なり。と心得^カ。古へ人^カれ^カ志^カわ^カざ^カ也。
○斷瓊^カ端^カ云。かく端。中尾。と三度。三處^カふ^カ物^カ。一^カ珠^カ
ひ^カし^カま^カて。申^カなり^カふ^カ就^カて。其^カ濯^カく^カ井^カも^カ。掘^カ三^カ處^カと
ハ云る也。とて此ハ坂瓊也。も^カ一^カ顆^カの^カ玉^カなり^カハ。端
中尾とハ云べし。尾とて。彼貫統^カし^カる^カ玉^カの^カ緒^カ
の末と云とこそ聞えし。○斷劍^カ末^カ云。此劍の

方にも本中未等の言ありて一柱毎に吹出氣噴之
中_ニ化生神號と云々や有べきなれど五度同じくや
と云んを厭て前條ふゆつりし。彼素尊の御劔と
省_ケ了例の如し加くて此一書の旨ハ皆上に出
しれはとて省きつ。

一書曰。日神與素戔嗚尊隔天安河而相
對乃立誓約曰汝若不有奸賊之心者汝
所生子必男矣如生男者予以為子而令

治天原也於是日神先食其十握劍化生
兒瀛津姬命亦名市杵嶋姬命又食九握
劍化生兒湍津姬命又食八握劍化生兒
田霧姬命已而素戔嗚尊合其左髻所纏
五百箇統之瓊而著於左手掌中便化生
男矣則稱之曰正哉吾勝故回名之曰勝
速日天忍穗耳尊復合右髻之瓊著於右

手、タナノコニ中、ナシマシ化、ナシマシ生、ナシマシ天、ナシマシ德、ナシマシ日、ナシマシ命、ナシマシ復、ナシマシ會、ナシマシ嬰、ナシマシ頭、ナシマシ之、ナシマシ瓊、ナシマシ著、ナシマシ
 於、タムキ左、タムキ臂、タムキ中、タムキ化、タムキ生、タムキ天、タムキ津、タムキ彦、タムキ根、タムキ命、タムキ又、タムキ自、タムキ左、タムキ足、タムキ中、タムキ化、タムキ生、タムキ燐、タムキ之、タムキ
 化、タムキ生、タムキ活、タムキ津、タムキ彦、タムキ根、タムキ命、タムキ又、タムキ自、タムキ左、タムキ足、タムキ中、タムキ化、タムキ生、タムキ燐、タムキ之、タムキ
 速、タムキ日、タムキ命、タムキ又、タムキ自、タムキ右、タムキ足、タムキ中、タムキ化、タムキ生、タムキ熊、タムキ野、タムキ忍、タムキ踏、タムキ命、タムキ亦、タムキ
 名、オシ熊、オシ野、オシ忍、オシ隅、オシ命、オシ其、オシ素、オシ彗、オシ鳴、オシ尊、オシ所、オシ生、オシ之、オシ兒、オシ皆、オシ已、オシ
 男、カミ矣、カミ故、カミ日、カミ神、カミ方、カミ知、カミ素、カミ彗、カミ鳴、カミ尊、カミ元、カミ有、カミ赤、カミ心、カミ便、カミ
 取、ク其、ク六、ク男、ク以、ク為、ク日、ク神、ク之、ク子、ク使、ク治、ク天、ク原、ク即、ク以、ク
クヲ、クハ、クシ、クラ、クノ、クヒ、クコ、クガ、クミ、クヲ、クオ、クシ、クテ、クミ、クコ、クト、クシ、クラ、クセ、クモ、クヒ、クヲ、クヒ、クノ、クカ、クミ、ク

ノ日、ノ神、ノ所、ノ生、ノ三、ノ女、ノ神、ノ者、ノ使、ノ降、ノ居、ノ于、ノ葦、ノ原、ノ中、ノ國、ノ
ノ之、ノ宇、ノ佐、ノ嶋、ノ一、ノ矣、ノ今、ノ在、ノ海、ノ北、ノ道、ノ中、ノ號、ノ曰、ノ道、ノ主、ノ貴、ノ
コ此、コ筑、コ紫、コ水、コ沼、コ君、コ等、コ祭、コ神、コ是、コ也、コ燐、コ干、コ地、コ備、コ
○天、○安、○河、○云、○云、○上、○に、○引、○萬、○葉、○七、○ふ、○此、○小、○川、○白、○氣、○結、○有、○流、○
至八、至信、至井、至上、至尔、至と、至ふ、至み、至り、至上、至の、至真、至名、至井、至也、至走、至井、至の、至意、至
なる、な故、なふ、な此、なの、な安、な河、なを、な小、な川、なと、なす、なり、なに、なこ、なる、な凡、なて、な井、な
とを、と川、とふ、とま、とれ、と池、とふ、とま、とれ、と汲、と取、と所、とを、と云、とふ、とて、と八、と百、と萬、と
神、神集、神會、神路、神段、神ふ、神て、神を、神い、神う、神ふ、神も、神廣、神き、神河、神原、神の、神状、神なる、神
ふ、ふ此、ふふ、ふて、ふを、ふ又、ふ小、ふ流、ふ也、ふ是、ふ等、ふを、ふ以、ふて、ふ只、ふふ、ふき、ふ程、ふに、ふ設、ふて、ふ

云、談辭なりしを知へし。○如^ミ生^レ男^者。子^ア以^コ為^ト子^ニ而^テ令^テ治^ス天^原也。此ハ吾^カ御^物亂^レを以^テ汝^キ生^レ子^ヲ其^子と吾^御子とせんと云意を例の省る也。又令^テ治^ス天^原也と云天忍穂耳尊の終ふ現^レ世^ヲを出^スる^ルに^テ。天^云留^ルる^ルに就^ルる^ル起^ルを云るに^テ。其他ハ上の一書と同一傳へ也。○日、神先食^ニ其^ノ十握^ノ劍^ヲ云云。此劍ハ素戔嗚尊の劍也。此^ニ素戔嗚尊所^カ帶^セ之^ル云云と有べきをさて此處ハ三度。次ハ六度。劍と瓊との同事此出んが煩ハ^レさに例の其^ノの一字に御名を合^テて省る状始^メの一書ハ書^カ法^ニ乃^カ如^シし。故^ニ今^ハ其^ノの一字上に御

名とよみそへつ。○素戔嗚尊含^ニ云云瓊^ヲ云云。此瓊ハ天照大神の御瓊也。此^ニも天照大神所^カ經^レ之^ル云云と有へきを省るハ是も前の劍ハ例の如し。近來の釋ハ難^シたるやう。天^原ハ無窮に大御神のちる^ルに^テ。此^ニも此^ニ子^ニに^テとせんとあるをい^ハく^ハ異^ナる^ル傳へたり。中畧又かく^テを^テ。六男皆天原と云る^ルに^テ。す如く^ハゆ^ルハ^ハい^ハれ^ルる^ルに^テ。又實^ニの素戔嗚尊の御子^トと云^フ神の御子と云^フに^テ。亂^レと云^フる^ル傳へたり。以上此^ニ難^シじの中に天原ハ天照大神の^ニ知^ラれ^ルものと心得^ルま^シ幽^冥と所^ニ治^ス神と云^フこ

やと不知て云るも疎う也。又次小素戔嗚尊御子云云と
つゝも其御物實と思ひたうへての疑ひなるも
上の一書に弁へけらるがごとし。

又髻華山蔭云そのうみちやく漢籍を信する世
となりて古傳をよき信する人をきうう。か
る邪説ハおこる也云云。又曰古傳の言をこれら
ととりて本文ハ作られしとぞそれのみよき
神代の巻れあまうみどりうくと見ふとあきらめ
文面れらるに異説を多く載られしとゆるべし
上なく云るこそかしこくもかみけふれ凡て
彼人ハ恒ふかくのみ云て此紀と舎人親王御作
と思ふとれりしハいふふか目せらるふのあらん
更ふ云ともあらん。

天皇の正史とミナカラ全作物ふせる其羅大なるへし。此
紀の一書とものつらきやふ委く弁へおきけられバ
更ふ云ともあらん。

○又自^リ右臂中ニ化^シ生活津彦根命云云是より以下の
三神ふも瓊を合て物ふ著るし有へきを上の三
神ふ准へさせて省る也。此類ハ上件よりナホラ比へて右
傳説中ふも本傳畧傳正語畧語あるしを知へし其
をさうば右難説等の如き疑ひハあうるへし。こゝコ此ふ
瓊を合て物ふ著るしを云はるそのうみ幼遊びふ
為し態を摸ウツしたる談辭ぞ。○燭之連日命上の軻遇

突智、段ふ同名あり。姓氏録に服部、連、燖、之速日、命、十
二世、孫、麻羅、宿禰、之後也とあり。ハ、軻遇、突智、段、神と
す由、此段なるを、未、物、見、あり。此、他、神、あり
る、既、出、。○六男云云使、治、天原、此、六柱、中、天、忍、穗、耳、
尊、ハ、正、し、と、天、を、ち、ら、し、其他も皆幽冥とを、ち、ら、し、
る、熊、野、忍、踏、も、忍、隅、等、の、御、名、以、て、知、へ、し、○宇佐
嶋、豊前、國、宇佐、郡、宇佐、郷、あり、其、地、を、云、此、地、海、島、ふ
る、也、其、河、一、ハ、神、武、紀、ふ、云、菟、狭、川、也、一、ハ、月、瀬、川
と云と、御社ハ、神名帳ふ、宇佐、郡、三座、中、ふ、比、賣、神、

社、大、神、と、あり、是、也、二座ハ、八幡、大神と、大、帶、姫、尊と
なり、後、ふ、此、二座と、並、へ、た、る、る、三、代、實、録、七、貞、觀、十
二年、二、月、奉、幣、告、文、等、に、出、其、文、上、ふ、引、つ、○今、在、海、
北、道、中、此、ハ、三、女、神、初、宇、佐、ふ、天、降、て、其、後、筑、前、沖、宮、
中、宮、邊、宮、ふ、遷、坐、よ、と、云、る、也、海、北、と、云、彼、三、所、共
に、皆、豊、前、ら、う、ハ、北、ふ、當、れ、る、と、以、て、云、ち、ら、う、道、中、と、云、
彼、種、麻、呂、ら、瀛、津、嶋、記、云、あ、を、れ、海、ふ、いと、清、ら、た、る、
真、砂、の、濱、に、栲、領、巾、引、を、へ、ら、ん、や、う、ふ、て、今、道、三
里、む、ら、う、け、き、た、る、ふ、あ、ら、う、松、原、遠、く、打、々、ふ、と
ち、ち、と、め、し、と、な、り、衣、笠、の、内、大、臣、に、山、ま、で

はくく海の中道と云ふ所も此處にやと云ふ
此道志加皇神宮の邊より中宮の方に亘れるより
なれば其を云ふ也然れハ此道中ハ恒々道前道後
と云に對へたる所あり思ふ混ふへうす諸抄
皆よろし○號曰道主貴ニテラヌニチトムチ貴ハ大日靈貴ニチと稱之同
し尊稱也然れハ道主も彼丹波道主と云道と云
別にして蓋初此姫神より靈驗を以て彼海中道
と顯わしゆいし故も尊て如此稱へたる所ありし
○水沼君ミヌメ此姓とやしく失へり姓氏録ふも載られど
されど舊事本紀も景行皇子武國タケクニ凝別命筑紫水間ミヌメ

君祖此紀ふも國乳別皇子是と云くや遺れ也或説
ふ胸肩氏ヲ為左座水沼氏ヲ為右座と云是も今そい
うありん三前の社人僅ふ十三人遺て河野氏深
田氏嶺氏等なり此中に水間氏ミヌメありや便ありけ問
ふやるへしかくて此一書し大意上にゆつる

宣長云道主貴云云此以下心得ぬ書狀也後人
うしるに書加へたる所ありん此ハ開化天皇の御
子彦坐王ヒコイマス御子丹波道主貴と誤て三女神の事と
して傳へたる所あり云云なりと云ふも強れハ中
作物と見ゆる所あり邪説なりいふ強れハ中
て丹波國と云筑紫海北道中と云へき所ハ

○上、件、天照大御神と、凡て姫神のまゝに傳へ来
 けり、是、神功紀の神託也、天疎向津媛命と、告、於、
 ふ、就て、な、し、し、と、れ、と、彼、媛、ハ、假、字、に、て、彦、み、對、
 云、姫、ふ、を、非、ず、大、日、持、の、義、な、る、と、以、て、天、疎、向、津、
 日、と、を、連、き、し、也、即、天、み、放、る、日、統、持、尊、と、云、意、
 なる、ぞ、う、し、其、よ、し、上、の、於、保、比、屢、咩、能、武、智、と、有、
 分、註、下、に、精、く、云、け、り、う、如、し、然、ハ、あ、ま、ど、か、く、
 尊、重、の、御、上、ふ、就、て、あ、れ、う、ち、男、辨、女、辨、の、論、を、
 き、取、ら、ね、ば、上、の、ま、ち、く、談、辭、ふ、隨、心、と、こ、に、い、
 へ、し、う、お、ろ、ろ、う、し、お、く、に、な、ん、

ちのまゝに、おのゝろ、乃、有、ま、を、海、原
 なる、海、原、の、ま、ま、に、お、の、ろ、乃、有、ま、を、
 ら、あ、ま、の、み、ま、ま、お、の、ろ、乃、有、ま、を、
 楊、花、大、人、乃、有、ま、を、大、人、乃、有、ま、を、
 ち、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ち、の、ま、ま、の、
 ち、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ち、の、ま、ま、の、

久しき御事
 ありしに
 入道に
 候ふに
 候ふに
 候ふに
 候ふに

御事
 ありしに
 入道に
 候ふに
 候ふに
 候ふに
 候ふに

Handwritten cursive script on the left page, consisting of approximately seven lines of text.

Handwritten cursive script on the right page, consisting of approximately seven lines of text.

